

れき ぶん
となん歴史民だより Vol.5

Morioka tonan folklore museum

平成17年12月20日発行

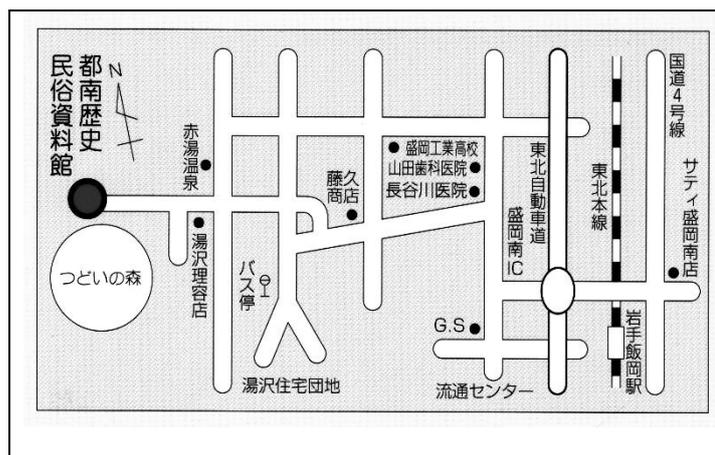
発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228



特別展「土人形」展のテレビ取材風景

MAP ☆ACCESS

- もくじ —
- ・機織りの糸かけ作業
 - ・史跡文化財めぐり報告
 - ・「土人形」展終了
 - ・指定文化財紹介⑤
 - ・民具・農具を貸出します
 - ・資料は語る⑤
 - ・となんの昔ばなし⑤



- 利用案内
- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
翌平日)
- 年末年始

はたお 機織りの糸かけ作業



図①. 機織りの部品の確認とその水洗い

当資料館には数台の機織りが所蔵されており、その1台は糸をかけない状態ですが展示を行っていました。しかし、より当時の状態に近づけるために、平成17年5月25日に花巻市の永田さんと盛岡市の三戸さんに来館していただき、1日かかりで機織りの糸かけ作業を行いました。

糸かけ作業の前に、すべての部品がそろっているかどうかの確認を行いましたが、当資料館には部品のそろった資料がありませんでした。そこで最も部品のそろった資料をもとに、足りない部品を所蔵資料から補い、1台の機織りを組み上げることにしました。部品が一通り集まったところで水洗いを行い、機織り組み上げの準備を行いました(図①)。

機織りの糸かけのために、事前に綾をかけた6mの糸の束を、本館内全体を使いまっすぐに伸ばし、オマキに巻きつけました。すべての糸が均等な長さで巻けるように、糸の束の間には厚紙を挟んでいきます(図②)。



図②. 本館内での糸の巻きつけ作業

糸を巻きつけたオマキを機織りに取り付け、糸と機織りを組み上げます(図③)。

糸の束の端を腰で引っ張り、右足にロープを掛け、巧みに機織りを動かしながら箴棒(おさわく)付きの箴(おさ)を前後に動かし、横糸を通して生地を織っていきます(図④)。現在では糸をかけた状態での展示となっています。

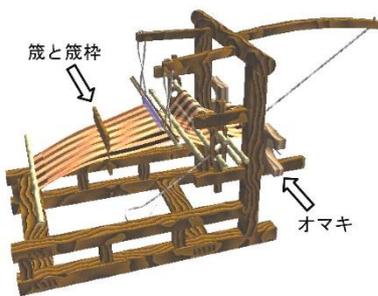


図④. 機織り作業



図③. 機織りの組み上げ

本文中の部分名称解説



箴(おさ)

竹ヒゴや薄い金属片をクシの歯のように並べ、棒を付けたもので、箴棒にはめて用いる道具です。

箴棒(おさわく)

たて糸の張り具合で支えられた、箴をはめて固定する道具です。

オマキ

両端は矢羽根形で、中央の丸棒にたて糸を巻く道具です。

参考・引用資料/ 川井村教育委員会「川井村民俗誌 民具編 —図説・民具とその周辺—」2000

史跡・文化財巡り

「歴史の街道散歩」～仙北街道～報告

(9月16日)

今年度の秋の史跡・文化財巡りでは、水沢市から胆沢町にかけての、胆沢城跡や徳水園などの史跡を巡り、仙北街道を通って胆沢ダムへ向かうルートで行われました。36名の参加者がありました。

絶好の日和に恵まれた今回の史跡・文化財巡りでは、各史跡などで説明を受け、例年のように内容の濃いものとなりました。



特別展「土人形」展終了

(9月15日～11月30日)

今年度の特別展では、土人形が民具などとともに描かれている事に着目し、当資料館所蔵資料とともに展示を行いました。来館者には素朴な花巻土人形や相良人形の中に当時の生活を感じていただけたと思います。

なお、一部の土人形資料については、当資料館で常時展示を行っています。



盛岡市所在指定文化財紹介 ⑤



国指定重要文化財 土偶

平成元年(1989)6月12日指定 旧文部省

遮光器土偶は、大きな目がイヌイットの遮光器に似ていることからこの名が付けました。この土偶は、遮光器土偶の中でもっとも抽象的で装飾的に作られており、顔全体に広がる大きな目、簡略化された鼻と口、頭の宝冠状突起が特徴です。肩が張り、腕と脚が太く短く、手足が極端に小さい形で、全体がかなり抽象化されています。部分的に赤い色が残っており、赤彩されていたようです。また首や胴の文様は同じ時期の土器の文様と同じで、土器と土偶の作り手が同じであったと考えられます。高さ31cmと大形の部類に入り、中は空洞となっています。

土偶は一般に女性像で、呪術に用いられました。具体的には、自然界の動植物を豊かにし、子孫繁栄などの力を発揮する精霊が土偶に宿る依代説、病気やけがの部分をごわして治癒を願う身代わり説などがあります。

当資料館では、遮光器土偶の複製標本を展示し、原標本は岩手県立博物館に所蔵されています。

参考・引用資料/ 盛岡市教育委員会 盛岡の文化財 1997

昔の暮らしを見つめてみよう

—学校や地域活動団体などへ—

農具・民具を貸出します!

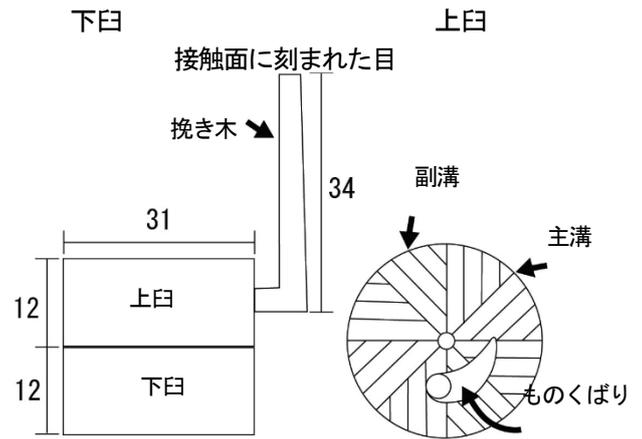
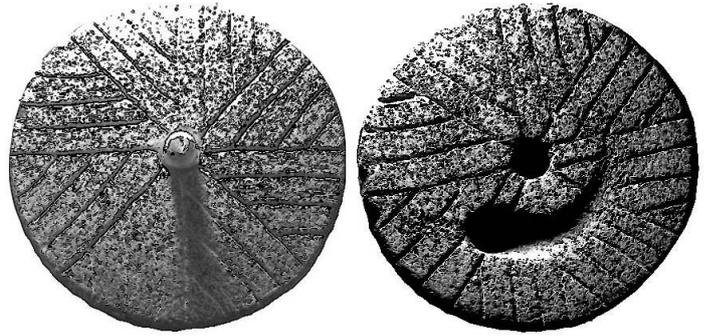
当資料館の、数多くの民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場に広く役立てていただくために、所蔵資料の一部を貸出します。

長い年月のあいだ使い込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する使い手の愛着が見え、手にとってはじめて知ることがたくさんあります。

資料の借受を希望する場合は、当館にご連絡下さい。



挽き臼 (三本柳)



側面観
上臼の接触面
法量 (cm) と名称

この道具の名前は挽き臼(ひきうす)と言い、単に石臼(いしうす)とも呼ばれ、当資料館には2資料が所蔵されています。挽き臼は上下の臼の間に刻まれた目によって、米・麦・そば・大豆など、ほとんどの穀物が粉に挽かれました。この上下の臼は花崗岩や安山岩などの石できており、製造や目たてと言う定期的な保守作業のため、石の加工技術が広く普及しないと実用化されません。一般に使われ始めたのは室町時代末頃で、江戸時代中期には農家の必需品のひとつとなりました。なお、1~2年臼を使うと目が摩滅してしまうため、定期的な目たてを行う必要があります。この目たては巡回してくる目たて職人によってされていましたが、後には自分で道具を持ち目たてする人もいました。

粉に挽く作業の中心をなすのは、上臼と下臼の接触面に刻まれた挽き臼特有の「目」です。これらは中心から放射状にのびる主溝と、主溝と平行に等間隔で刻まれた数本の副溝から構成されています。さらに主溝の数には地方の特色があり、九州と長野県近辺に主溝が6本(6分画)の場合が多く、他は一般的に主溝が8本(8分画)であり、当資料館所蔵も2資料とも主溝が8本です。また、上臼を動かすための挽き木の取り付け方にも地方の特色が見られ、当資料館所蔵の挽き臼のように挽き木を上臼の側面に空けた穴に差し込む方式(横打ち込み式)は日本各地で一般的に見られる型です。

参考・引用資料 / 名古屋博物館 「臼—食の道具—」 1979

とんなんの昔ばなし⑤
狐にだまされた話

昔都南地区の永井に米三という人がいました。

明治の末頃、メリヤス(機械で伸び縮みするように編んだもの)のシャツや股引(ももひき・細いズボンのような形の衣服)が売り出されて間もなく、米三は隣の友人から新しいメリヤスの股引を借りてはき、浦地(仙北町)の親戚のお祝いにきました。秋の日は短いにもかかわらず、家が彼の迎えに出ました。野田のあたりまで行くと、道ばたの大根畑のうねにまたがって、何やら大声をあげて叫んでいるのは確かに米三です。「この畜生(ちくしよう)もつと走らせろ、もつと走らせろ」と馬に鞭(むち)をあてるように、片手をふりあげ振っていました。得意げに馬にまたがっているつもりです。お祝いのごちそうは、どこにもなく、米三の首にはただ空の風呂敷(ふろしき)だけが掛かっています。米三は狐にだまされ、ごちそうはとられて、いい気分になって馬に乗って家路についていたのです。借りてきた大事なメリヤスの白い股引はすっかり泥だらけになって、きたなくなっていたということです。(終)

■ 出典 『とんなんの民話』
(都南歴史民俗資料館)